



「電気」と「気流」と「振動」 カイザーサウンドの集大成となる オーディオルームを訪ねる

6回の連載となった本シリーズも、今回が最終回である。「電気」と「振動」、そして「気流」の3つをステレオ再生のテーマとして掲げ、ひたすら己の道を開拓し続けるカイザーサウンドの代表、貝崎静雄さんの生き方には、オーディオ人としてだけではない。何やら奥の深いものを感じつつある筆者である。

●レポート：
林正儀
Masanori Hayashi
photo by 福谷 均



貝崎さんが、山田さんの要請を受けて、5年がかりで完成させた24畳のオーディオルーム。地元である志賀高原の原木杉を使ったオーディオ壁に加え、床にはフランスパイン材を使った「サウンドフロアー」を採用。その全てがカイザー寸法で厳密に管理されている。部屋のどこにおいても音像が全くぶれない不思議な空間だ。

カイザーの実験室でもある オーディオルームを訪ねる

さて、ローゼンクラッツの軌跡の旅として今回訪問するのは、長野県は志賀高原の山田耕吉さんだ。実は長岡京の植村良彰さん(第3回に登場)宅の床や壁工事を貝崎さんとペアで行ったのは山田さんその人。とはいえ大工さんではない。ローゼンクラッツの熱烈なユーザーであり、あの志賀高原杉の木材店とも親しい、実に頼もしい方なのだ。車の運転や整備のテクニックもプロ級である。

24畳の広々としたオーディオ専用ルーム。母屋とは独立だし、周囲を森や畑に囲まれた、数百メートルは隣家のない、うらやましいほど静かな環境である。都会の喧噪を離れ、オーディオのためだけに引越すのもアリかもナ……と思う。

壁、床などの施工はまたのちほど紹介するとして、驚くのはラックやインシュレーター、ケーブルに電源ナイアガラ。そして気流の3種の神器をはじめとする各種アクセサリはもちろん、音の入口からアンプ、フルレンジ一発のスピーカーまでオールカイザーのフルシステムでとんと揃えていることだ。

「音源はほぼパソコンで、カイザーさんの1号機がこれですよ。あの自作PCまで愛用するとはマ

イリマシタ……。貝崎さん曰く。「ウチの実験室にさせてもらっています。(電気、振動、気流)の3つを完璧に追求すると、どんな音になるのか。この音を聴いていただけば全てが解明されるはず！」と太鼓判だ。ではどういふきっかけで貝崎さんと出会ったのか? オーディオ歴などお聞きしたくなった。

**設置位置で音がコロコロ変わる
カイザー調整を目の前で体験**

山田さんは中学生くらいからオーディオが好きで、近所の家には皆ステレオがあったという。仕事についてからは本格的な趣味となり、クリプシユヤタンノイのコンサートバリー。さらにマッキントッシュにゴールドムンド、ワディアとのめり込む。さらに高じてPMCのプロ用スピーカー「BB5」のマルチシステムを導入。マニア垂涎のフラッグシップ機である。

「そのころネットでカイザーゲージを知り、調整のため2個注文したのです」

なんで1個じゃないのか? 珍しい。山田さんもスピーカーの位置によって音がコロコロ変わることを体験し、そんなきっかけから貝崎さんが「BB5」でチューニングをすることに……。6年ほど前のことである。

目の前でカイザー調整を見せられると、これはもう次に行くしか

ない。「まず脚まわりということ、BB5専用のスピーカー台を作ってもらいましたね」。

インシュレーターも、どうせやるなら3・3万円の最高級モデルの「ジャイアント」だ。また音が良くなる。そしてラックが入り、電源からラインケーブル、スピーカーケーブルとみるみるアイテムが増えていった。そうしたなかで、カイザーのカー用フルレンジスピーカーの音に接して、BB5を手放す決心がついたそうだ。15インチの大口径ウーファーは確かに低音の迫力はすごいが、音がバラバラに聴こえてまとまりが悪い。ところが比較で持ち込んだカイザーの「The Maestro」は、音像がビシッと一点にきまつて微動だにしない。軽快ですこぶる反応が良く、貝崎さんがよくいうプロ野球の打者やドラマーのように、スナップの効いたジャストタイミングな音。何よりも音楽心に溢れ、自由闊達で楽しいのである。

**壁から床まで部屋全体で
音の流れを徹底的に実践**

部屋の施工面についても、貝崎さんのクリニクが同時並行で進んでいたそうだ。当初壁は石膏ボードだったのが、「方向性を見てもらい、私がベニアの壁に貼りかえました」。これもすごい。正面の杉板は、例によって木が育った

音楽の震えるような感動と核心への探究 ローゼンクランツの未知への挑戦に期待したい



山田さんのお宅から1kmほど先にある製材所では原木を管理している。実際に木を丸太の状態のまま購入して、1年間陰干ししてから、カイザー寸法にサイズを指定してカットしてもらう



貝崎氏のオーディオだけでなく、生き方にも共感する筆者



鋳物と板金のハイブリッド構造による電源ボックス「NIAGARA / Hybrid」(¥370,000)



ローゼンクランツの秘密兵器。コンセントに差すだけで微弱なノイズ波を平滑にする



現在試作中という謎の新製品の数々が設置されている。山田さんのリスニングルームは同社の製品開発の実験場所にもなっている

音に一切の迷いがなく、リズムのキレ味は無類。ストーリーを絵に描いたような、駿足、明快なハイスピードサウンドだ。山田さんが好きだというロックをかけていたのだが、走る方向が明快だから、音に一切の迷いが無い。リズムのキレは無類。突き抜けるビートも快感だ。立ち上がりの速さと引き足の速さ。そしてローエンドまでのびた持続音の深さには、心底感動させられた。そうか、山田さんが「B5」との決別を決めたのはこの

● 試聴体験 音に一切の迷いがなく、リズムのキレ味は無類

う。するとユニットが動き、それが「ミラクルサウンド・シャワー」の音を仲良く共鳴させる。その振動は台座から床へ……。「するとコイツがスピーカーに化けるんですよ！」と貝崎さんは、いとおしそうにバインの床を撫でていた。つまりスピーカーが鳴れば、床にその意思が伝わって響き、壁面もラックもコンポたちも歌い出す。そんな想像さへしてしまいう見事な調和の世界だ。ユニット以外動くことまかりならぬとする、スピーカー理論の常識を越えたワンダーランドがここにある。

度あれば「は特に良かった。私が持参したワイリアムス造子やオペラなどを聴くと、これまで体験しえない次元の森林浴のような空気と柔らかなアルトボイス。ライブ感溢れる壮麗なサウンドステージに包まれ、思わず拍手したくなったものだ。

曲だったのか。量感よりも速さが大事だと……。貝崎さんがたたくにフルレンジにこだわる意味も分かった。量感なら大きなユニットを持つてくれば済むわけだが、「僕がなぜそれをやらなかったか」というと、このイメージがあるからなんです。完璧なタイミングと反応力が、いかに大切であるか。これは貝崎さんが手がけるすべての製品に共通する思想だろう。つきつめれば、音色や様々なニュアンス表現も、タイミングを極めることによつて自ずと得られるもの。ジャンルを問わず、ヴォーカルもジャズも無論クラシックや演歌であろうと、おのずと魅力的な音色と音質で楽しめるものだと思う。震えるような感動を呼び覚まし、音楽の核心に触れられるはずだ。MJQや井上陽水の「人生が二度あれば」は特に良かった。私が持参したワイリアムス造子やオペラなどを聴くと、これまで体験しえない次元の森林浴のような空気と柔らかなアルトボイス。ライブ感溢れる壮麗なサウンドステージに包まれ、思わず拍手したくなったものだ。

オーディオ研究の買が車の新規事業にもつながる

最後に木材店の話と、クルマの話で締めくくろう。これが志賀高原の地元杉か……。現地まで足をのばしてみたが、山から切り出したその原木を貝崎さんが見定めをして(年輪で素姓を見るそうだが)買付け、十分な乾燥の後カイザー指定のサイズに採寸、カットしていいいに仕上げてもらうという。気さくな店主で、オーディオ用であることを理解してもらったうえで協力してもらったのだが、何だか親しみが湧いてきた。「オートローゼン」という車の新規事業を開始し、貝崎さんはオーディオの五感を研ぎ澄ますべく、志賀高原にカーショップを展開。アルファスパイダー、マセラッティなど10数台の中古外車を所有し、日々研鑽し続けているのだという。

確かに車のアクセルやブレーキ、コーナーリングなどの動力性能は、動物やアスリートの瞬敏な動きにも例えられよう。そこにヒントを得てのオーディオ研究の一貫が、どのような形となって成果を挙げるのだろうか。より高い峰を目指す、ローゼンクランツの未知への挑戦を期待しよう。



ローゼンクランツのスピーカーシステム「The Maestro」(¥1,800,000/ペア)。シングル駆動で、下のユニットはマグネットなしのパスシブ動作。エンクロージャーは7面体構造でカイザー理論の寸法比。内部には「ミラクルサウンド・シャワー」のロッド棒が内蔵され、気流をコントロールしている



ルームチューニング効果もある「カイザーラック / Gen2 (ピタゴラス仕様)」もカイザー寸法で組み上げられている



再生はカイザーサウンドがフルオーダーで組みあげたパソコンで行う



15Wの直熱管シングルアンプ「P-1EX」。A級シングル完全無帰還で、電気の流れや振動の流れも厳密に管理されている



音響拡散装置「ミラクルサウンド・スクリーン」(¥500,000/1組)。ハードメイプルの無垢材を職人がログロを回しながらノミ1本で仕上げている



設置するだけで気流の力を利用して、音楽の魅力を引き出す「Sound Revolver」(¥70,000/1本)は、オーディオラックの中心に設置されている

部屋に1本置くだけで、気流をコントロールする「Stream Reviver」(¥140,000/1本)はラックの手前に設置



共鳴音叉装置の「Stream Reviver」(¥120,000)

順番だ。「貝崎さん親子と私の3人の協力作業です」フローリングの下に根太を敷いて、桜の集成材をカイザー寸法で切ったそうである。いちばん上に敷いた「カイザーフロアー」は、何と私の訪問の10日前に切ったとのこと。かけ足で部屋ができる経緯を紹介したが、「5年がかりで、ひとつずつデータをとりながら完成させていきました」と、貝崎さんはいう。なるほどカイザーサウンドの集大成に相応しい壮大な実験ではないか。改めてオーディオルームを見渡すと、貝崎さんの信念である音の流れる方向。すなわち「奥から前、内側から外側、下から上へ」という3つの広がりを持つパターンの、見事に実践されていた。

この部屋にあるものを「52.5cm」のカイザー寸法で統一。まず、正面の志賀高原の原木杉である。この連載でご登場いただいた長岡京の植村さんも、仙台の益野さんも、もちろん東京のカイザーサウンドのシヨウルームにも、節目の見える杉材が使われていた。節は枝の部分なので、節があつた方が粘りが出てオーディオ的に良いそう。ここでは2本の40cmの丸太から、生えている方向や年輪の順に戸籍簿管理をして板材として並べている。同じ兄弟の木だ

から、響きの波長が合い、美しく調和するわけだ。床もご覧のとおり、全てカイザーゲージで採寸されたウッド材がきれいに敷かれていた。3層の一番上。スピーカーラックが乗る「カイザーフロアー」(サウンドフロアー)は、以前敷くだけの簡易フロアと呼んでいたものだが、フランスの海岸に生えている良質のバイン材(松)で格調高く仕上げられている。響きのピッチについては、下に敷かれた桜の集成材も根太も、もちろん和音配列のカイザールールが適用される。

ここまでこだわると一種の美学だが、それだけじゃ終わらない。拡散板付きのカイザーラックも横幅52.5cm。そしてカーディナルシリーズの最高峰、「The Maestro」は、ご覧の通りの7面体構造でその寸法比は無論カイザーセオリーによるものだ。これはいままでも知らなかったことだが、何と気流3兄弟の「ミラクルサウンド・シャワー」のステレオスロッド棒をエンクロージャーの内部に仕組んである。ユニットはワイヤーストレックスのカイザー特別仕様手漉きの和紙コーンと、完全コンビ設計のパスシブラジエーターで、いまスピーカーに音楽信号が入ったとしよ